

乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の 教育

6
2008



私と私たちの物語を 生きる子ども

小林紀子/編著

実体験が不足する現代、既成の物語を取り込みながら遊びを広げる子どもの姿を取り上げ、子どもの育ちを豊かにする物語について考える。

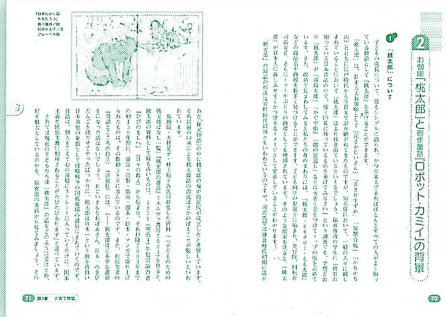
21×15cm 192頁 定価1,680円(税込)



小林紀子
編著

フレーベル館

107-10



もくじ

- 第1章 子どもと物語
- 第2章 喰うか喰われるかの物語
- 第3章 子育て物語
- 第4章 冒険物語
- 第5章 力を合わせる物語
- 第6章 消費社会に組み込まれる映像物語
- 第7章 行きて帰りし物語
- 終章 「私と私たちの物語を生きる」ことの意味

キンダーブックの

フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

幼児の教育

第107巻 第6号



乳幼児期の育ちと保育を考える

幼児の教育

第107巻 第6号

もくじ

巻頭言

実践的研究の面白さと難しさ

無藤 隆

特集 子どもと自然

虫は子ども達の友達 津吹 卓

ふれあい動物園 福田 努

木の心 小山千秋

動物と生活する中で感じたこと 池田佐和子

ある日



子どもとその家族の幸せを願い続けて

ダーリンブル・規子

子どもと保育の情景 (18)

戸田雅美

「ずるいじゃないの!」考

上海⇄東京 子育てメール便 (3)

橋本雅子・津守多実

保育の現場から

藤樫啓太

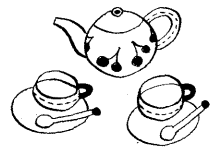
言葉がけの難しさ

お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み (18)

地域センターにおける総合的な「保育」の場

塩崎美穂

イギリス視察訪問 (1)



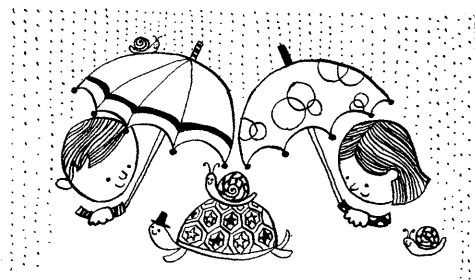
実践的研究の面白さと難しさ

無藤 隆

実践的研究の広がり

保育・幼児教育の世界においても、しだいに学問的な確立が進んできています。大学院も広がり、そういった専攻が可能どころが増えてきました。実践者の中から大学院に進む人も、かなり出てきています。大学院育ちの研究者にも、現場へのかかわりを通して研究を進めようと努力する人が少なからずいます。ようやく、現場に根ざす研究が可能になりつつあると思います。それはつまり、天分に恵まれた特別な研究者・実践者の感動に満ちた著作というのではなく、一般の研究者が、通常の研究活動で出していく論文という意味です。

とはいえ、まだまだ研究の困難さがあるいろいろな面にあります。いかなる研究も難しいものであり、新たな開拓には陥穽かんせいがつきものだという事情は当然です。



が、それと別に幾つかの問題が散見されるように感じます。それらがダメだということではなく、良さの裏返しとしての問題が残るということであり、その克服がこれからの数年の大きな課題となるという意味です。

研究的論文の陥る困難

保育の実践にかかわる研究としては、保育の固有性をいかに組み入れるかが問われるべきでしょう。その点がいまいであったり、時には、保育の問題と無関係のものが見られます。その保育ということは広く解するべきで、制度としての幼稚園・保育所に限定されるべきではないとは思いますが。

心理学なり哲学なり歴史なりを基礎とした研究であるなら、その専門の学会での水準をある程度満たすべきではないでしょうか。とはいえ、境界領域にある研究はそういった厳密な規定からはみ出すからこそ、新たな場を求めざるを得ないし、そこにオリジナリティーも生まれるのですが。

学際性を求めるあまり、拡散してしまっているものも見られます。何もかも総合的にとらえようとして、学問的研究というより、勉強ノートみたいになったり、諸研究の恣意的なつまみ食いになるのです。

逆に、学派的に閉じていて、隘路あいろに入り込んでいるのではないかと観測されるものもあります。引用を見ると、どうやら二、三人の指導教官や影響を受け

た研究者が挙がっていますが、それ以外は存在しないかのような扱いになっていて、その学派の顕彰を行っているような論文です。

実践的研究の陥る困難

実践者ないしその出身の人の書く論文に比較的多い困難な点は、一つは記述に終わってしまうものがあるということです。いろいろなエピソードがあがっており、なかなか興味深いと思って読んでみると、最後はごくありきたりの「遊びが大切」という類の結論になっていたりします。結論がエピソードの分析から、どう展開されたかが論文の命の命はずです。

先行研究の検討が軽視されることが多いのではないのでしょうか。確かにデータベースが完備されておらず、また先行の論文がたくさん種類の学会誌や紀要に散らばっていたり、著作やその章に書かれていて、探しにくいことは確かです。でも、あまりに無駄な繰り返しが多いと思います。

エピソードの記述が面白い反面、時に粗過ぎるのではないのでしょうか。研究を先に進めるためには、ビデオなどでも通常の実践の際のメモを超えた詳しさを検討することも有益な手立てです。

理論の扱いが、時に単純化されていることも気になります。これは半ば以上、長年研究プロパーでやってきた大学の研究者の責任だと思えますが、その



紹介や議論が充分に丹念なものになっておらず、その簡単なものをさらに単純化してしまつて、実践的論文で議論する傾向を感じます。

今後に向けて

以上の苦言めいたことは、決してだから「実践的研究を行うべきではない」ということを意図して書いているわけではありません。その意義を充分に認めただ上で、今後、特に大学院などで勉強し研究をしようとする若い研究者の皆さんに、伝えたいことなのです(なお、若いとはキャリアのことです、年齢ではありません)。

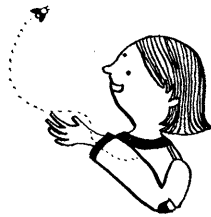
先行する論文や理論をちゃんと探し、たくさんものを読んでほしいと思います。実践について過剰なまでに詳細に至るまで記述することと共に、整合的に上手に説明しようとして、誰かの理論を借りてくる前に、ていねいに自分で考えてみてはいかがでしょうか。いかなる学問にも長い伝統があります。そのすべてとはいわず、少しでも畏れをもつて学ぶべきです。同様に、実践現場にはその事情があり、知恵があります。それをやはり深く探り取るべきだと思つたのです。その先に、実りのある豊かな実践とその研究の世界が開きます。そのために手間暇を惜しまずに、一緒に学んでいきませんか。

(白梅学園大学)

虫は子どもの友達

— 虫と遊ぶその奥で何に気づくのか —

津吹 卓



虫と遊ぼう

子どもはみんな、もともと虫が好きです。子どもを見ていると、僕にはそう思えてなりません。なぜでしょうか。それはきつと、動くものへの興味なのではないでしょうか。だから虫を見ると、追いかけて捕まえるのではないのでしょうか。そして虫採りの

遊びの中で、自然に虫と友達になり、夢中になって追いかけて、捕まえるのです。たとえばダンゴムシ。

子どもは捕まえ始めると、たくさん欲しくなりまします。すると、どこに行けばたくさんいるのか、どうしたらたくさん採れるのかを考え、いろいろ工夫します。自然の中で、無意識のうちに頭を使い、体を使い、満たされる喜びを体験するのです。

子どもたちは、虫採りから多くのことに気づき、ごく自然に学んでいるのです。うまく採れない子どもがいた場合、大人が採り方を教えて、うまく採れたら褒めればいいのです。すると子どもは自分で採ることができ、褒められて、もつとうれしくなります。そして、虫採りがさらに好きになります。友達から学ぶこともあるでしょう。一番大事なことは、自分で捕まえる体験であり、そのために自然から学ぶことなのです。しかし現在、このような体験のない中高生がいかに多いことでしょうか。

虫とのつき合いを深めよう

虫とのつき合いをもつと楽しくするには、どうしたらよいでしょうか。それは、五感を使って「虫の生き方」を感じとることです。「視覚」は当たり前ですが、子どもは自分が気になったところを勝手に見えていますね。だからお母さんや先生とは違うことに

気づくことも多いのではないのでしょうか。見方はそれぞれでよく、何が正しいというわけではありません。だから何に気づいたのかを子どもに聞いて説明してもらい、意外性に驚き、共感すればよいのです。

虫には「におい」もあります。種類によりますが、たとえばちよつとした丘に普通にいる白いチョウ、スジグロシロチョウの雄をかぐと、レモンのようなにおいがします。これは交尾のために雄が雌に近づいたとき、雌をなだめるにおいです。

ミカンの木などにいるアゲハチョウ類の幼虫を突つくと角を出し、そこから敵を撃退するための強いミカンのようなにおいが漂います。僕はこのにおいが好きです。バッタなど草食昆虫のふんを手でもんでみると、草のにおいがします。すると、このふんはそんなに汚いとは思えなくなります。クヌギ林を歩くと、カブトムシのにおいがすることがあります。きつと夜には飛んできているのでしょう。カ

メムシの仲間には、驚くと異臭を放ちます。敵を撃退するためです。

「手触り」も、虫を手で捕まえてみて初めてわかります。六月中旬に羽化したばかりのアカトンボは、赤ちゃんのほおのように柔らかでみずみずしく、強く持つとつぶれそうです。でも時間がたつと硬くなり、十月下旬の老年のトンボの肌は、人間と同じと言ったら怒られてしまいますが、カサカサです。羽化後にだんだん硬くなるのは、どの虫にも共通です。手に持ったセミが鳴くと、手に震動が伝わりま

す。虫を手で持っていてかまれることもあります。偶然ですが大切な体験です。虫も嫌なときはかむのです。虫は生き物であり、おもちゃではないのです。痛いから、子どもはかまれない持ち方を工夫します。僕が今までかまれたのは、トンボ・カミキリムシ・クワガタムシ・カマキリなどでしょうか。

手に止まらせたテントウムシが指の上に登ってい

き、いきなり羽を広げて飛ぶ、これは、子どもには大きな驚きです。

日常でよく耳にする「虫の声」は、セミやコオロギなどでしょうか。しかし目をつぶってみると、意外な「虫の出す音」に気づいたりします。虫が歩くときやアオムシが餌をかじるとき、カやハチ、カブトムシの飛ぶ「羽音」など。またカミキリムシは、首でこすってキイキイと鳴きます。

「虫の気持ち」を考えよう

虫ともっと親しくするには、虫の動きを見て「虫の気持ち」を考えるとよいでしょう。では、どんな虫の何を見ればよいのでしょうか。

虫は普段よく見る虫で充分です。なぜなら、いつでも何度でも見ることができからです（でも時には一期一会のこともあります）。そして、どんな動きを体のどこでするかを見ることです。虫も生きて

いるので、自分のために、食べて・出して（排泄）・歩いて、跳んで、飛んで・体を掃除して・体温を調節して（変温動物なので寒いと日光浴をし、暑いと日陰へ逃げる）、アオムシなどは脱皮したり、羽化して親になる（たとえばセミ・チョウ・トンボ）などが挙げられます。また、雄は鳴いて同じ種類の雌を呼んで（セミ・コオロギなど）交尾をするし、他の虫との関係では、相手を食べたり（トンボ）、敵から逃げたりと必死です。動きにはこんなシナリオが考えられます。

では、虫のいる現場ではどうするのか。たくさん捕まえることに満足した子どもは、次に虫をよく見ようとしています。そのときに動きを見て、「この虫は何をしたいのだろうね」などと、一緒に考えていたのだと思います。正解は不要です。虫の「気持ち」になって「謎解き」をしてください。理屈で言うと同じ虫をいろいろな場面で何度も見て、虫の動き

やしぐさの共通点や相違点を考えながら真実に近づく」ということです。大事なことは、正解や知識ではなく考える過程であり、謎解きを楽しむことです。

虫を飼うといろいろなしぐさが観察できて、もっとよくわかると思います。一匹の虫でも「虫の体調」によって動きも違うし、日によっては同じことをしないことに気づくかもしれません。また、同じ種類でも、虫一匹一匹で行動が異なることもよくあります。体の大きさが違ったり、個性や生きてきた中の「学習の違い」もあるかもしれません。虫は同じ機械ではなく、一匹一匹がそれぞれに生きているのです。そして、時には「死ぬ」ということも起こります。寿命で、また子どもが一所懸命に飼っても、いい加減に、あるいは間違った飼育方法で、または病気でと、死ぬ原因はさまざまです。そのとき、なぜ死んだのかは考えてほしいと思います。最も大事なことは、生きているものは必ず死ぬという体験で

す。時には、子どもが虫をいじめて殺すこともあるでしょう。でも、子どももともと残酷な面ももっていると思います。現在子どもにとって、家庭における「死」の体験は激減しています。死ぬということを、たとえ虫であつても体感させてほしいと思います。

なお、凶鑑の使い方ですが、無理に読ませる必要はありません。生きている本物から学べばよいのですから。ただ、凶鑑を見たがる子どもには、見せればよいと思います。その場合、実物を見ることで知識が確認され、真実を理解する上で役に立つでしょう。単なる凶鑑の知識だけあつても、あまり意味はないと思っています。

次に「虫の名前」の扱いです。正しい名前がわかればそれに越したことはありません。子どもは理屈抜きにすぐに名前を覚えてしまいますから。でもわからなければ、よい名前を付けければいいのです。子

ども同士、あるいは大人と、どの虫の話かわかればまずはよいのです。子どもたちがよく言う「バナナムシ」は、ツマグロオオヨコバイの幼虫です。でも、黄色くて三日月形だからバナナムシなんて、ピッタリのネーミングではありませんか。

「虫の生き方」から

「ヒトの生き方」の感覚を学ぶ

これまでも触れましたが、虫は生きています。それを見ることで「生き物の感覚」や「生きるって何だろう」ということを、子どもは体感を通して無意識のうちに気づくのだと思います。前述のように、虫は同種でも個体間で違い、さらに同じ個体であっても時と場合により動きは異なります。これはヒトと同じですね。そして、虫は勝手に虫のペースで生きています。決して子どもの思いどおりにはなりません。餌をやらないと死に、一所懸命にかわいがつ

ていても死ぬのです。電池で動くおもちゃとは基本的に違うのです。たとえば、働きアリも調べてみると結構サボって(?)いるのです。でも、敵から襲われて逃げたりする大事な場面では、決して手を抜きません(もし手を抜くと死につながります)。虫は「すべてを完璧に」を目指してはいないのです。虫はよい意味でいい加減な生き方で、うまく生きているのです。

では、ヒトはどうでしょうか。虫もヒトも「生き物」です。しかし、最近の生徒や保護者は「完璧を要求」し過ぎる傾向があり、その結果 *All or nothing* となってしまうのが非常に気になります。これは全国的な傾向です。

私たちは人である前に、動物としてのヒトなのです。しかし、それをわからずに「完璧なよい子」を要求する保護者がいて、それに応えようと完璧を目指し燃え尽きる生徒がいるのです。保護者も生徒

も、生徒の心や体の悲鳴に気づかないのです。ストレスを内側にため込むと不登校につながり、外へ強く発散すれば事件を起こしてしまうのです。

勉強でも、本来ごく自然な「なぜだろう」とか「不思議だなあ」とか「わかった、そうなんだ」という素直な気持ちがなく、テストの得点だけを意識して理解抜ききの暗記に終始する生徒が多いのです。もっている知識を基にして調べ考え、自分なりの考えを組み立ててつくり出していく喜びを知らないのです。生活や自然の中の体験が極めて乏しく、素直に学ぶ体験もせずに育ってきているのです。多くの高校や大学の先生方からも、同様の話をよく聞きます。

将来、*本来の人*らしく生きていくためにも、虫を含めた自然体験は極めて重要です。生き物の発想から、人の生き方を考えられればと思います。

(十文字中学・高等学校へ理科／生物／教諭
十文字学園女子大学児童幼児教育学科非常勤講師)

ふれあい動物園

福田 努



出会い

福田牧場は、二十年前に「子どもたちに本物の牛を見せたいので、連れて来てくれますか」と、ある近所の保育園の先生から依頼されて始まった、移動動物園です。

七百キログラムの巨体のホルスタインを、その保育園のブランコにつないだときにあがった歓声は、今でも耳に残っていて忘れられません。子どもたちの「わあー」「きゃー」という、まるで恐竜がやってきたかのような驚きの声でした。

今は安全面や衛生面などで、残念ながら、成牛を連れて行くこともなくなりました。

移動動物園と一言で言いますと、ゾウ・キリン・ライオンなどのイメージがあるのででしょうか。子どもたちからも「ゾウさん来た?」「ライオンは?」などとしばしば質問を受けます。

そういう声を準備中に耳にすると、子どもに、「どんな動物がトラックから出てくるか、楽しみに見ていて」と言ってみます。

そのときには、子どもたちはゾウもライオンも忘れて、ヤギやヒツジが出てくるたびに歓声をあげて

います。

現在の動物の種類は、ポニー・ヤギ・ヒツジ・ブタ・アヒル・ウサギ・モルモット・ニワトリ・ヒヨコ・カメ、そして人間のスタッフと、乳を搾る乳牛が十二頭と子牛が三頭います。動物園に出かける前に搾乳をして、また、夕方に搾乳をして、ようやく一日の仕事が終わるのです。

何度か、もつとほかの動物を入れてみようと思つたこともありました。しかし、酪農を営んできた私にとって、移動動物園もその延長であり、生き方そのものでありたいという気持ちから、最初は、「出前牧場」という名前で、家畜中心の動物園を始めたのです。

今も昔も……

私が子どもころは、たいていの農家の納屋には、牛やヤギがいました。

学校帰りに友達とのぞいては、「ヤギの子どもが生まれたよ……」などと話をしたもので、身近に動物がいる暮らしが当たり前でした。

人間の生活が便利になるにつれ、動物は本の中でしか、なかなか見られなくなってきました。近ごろはペットが飼えるマンションが増えてきましたが、ヤギ、ヒツジを飼うことは不可能で、動物園でも、ブタを見ることができません。

めざましい経済成長は誇らしいことですが、その一方で、ほのぼのとした生活環境や自然が減ってしまったことは事実です。

しかし、二十年ずつと変わらないものもあります。それは、子どもの感性と、きらりとしたその瞳です。

あいさつで始まり、動物の扱い方の話を聞いてからの子どもたちの行動は、それぞれに個性がありますが、何度立ち会っても、子どもたちの行動を見飽

きることもなく、こちらも楽しんでいきます。

かかわり

ポニーには乗ることができます。しかし、子どもの目線では、大きい動物に見えるのでしょうか。真つ先に飛んでくる子もいますが、じつと、遠くから見ている子も少なくありません。それでも、ポニーに乗って楽しそうな友達を見て、自分もやってみようと勇気を出して乗りにきます。一度乗ってしまくと、ポニーのぬくもりや心地よい振動が伝わるのでしよう、また列に並んで乗る子どもがいます。

乗馬という行為は、障害をもつ方々のリハビリにも用いられるほどですので、馬と人間の関係は深いものがあるのかもしれない。

ヤギ、ヒツジは、とても人なつっこく、自分から子どもの方へ寄って行きます。時には、持っている餌の野菜をいきなりパクリとされて、半べそをか

子どももいます。親の世代でも、あまり

接したことの少ない方が多い

ようで、五月

の毛刈りを終

えたばかりの

ヒツジを見て

て、大人でも

ヤギと間違え

ることもあります。

特に、ヤギ、ヒツジは、餌をよく食べてくれるので、餌を与えることは子どもには楽しみの一つです。

春先の子ヤギや子ヒツジを披露すると、子どもたちには愛おしさいっぱい笑顔が広がります。しつぱ



▲わたしは、お母さんヤギ



をふりふり、親のおっぱいを口いっぱい含む子ヤギを見た子どもたちは、

「いっぱい飲みなさい」

「おいしい？」

と、お兄さん、お姉さん気取りです。こうして、春のシーズンは特ににぎやかです。

大きいブタも見せたいのですが、運ぶのが大変なので、小さい子ブタを連れて行くようにしています。ブタのしっぽを見たことがありますか。大人で

も意外と見たことがない方が多いようです。鼻に特徴があるので、どうしても、ブタの顔ばかり見てしまいがちです。

頭のよいブタは、人間に餌の催促などシグナルを送ります。『ブーブー』という鳴き声で訴えたり、また、つぶらな瞳でじいっと見つめてくれたりします。

しっぽだつてちぎれるくらい一所懸命振ってくれるのです。大きなおしりをしているのでなかなか目立たないのですが、かわいいしぐさです。

ウサギやモルモットは大きなサークルで囲み、子どもたちが中に入っているやベンチに座って抱いたり、触ったりできます。自分たちより小さく弱い物に対する扱いはいいねいで、口調は母親のようです。

「おりこうさんね。だっこしてあげましょう」
と話しかける姿が見受けられます。

しかし、窮屈に思ったウサギが、子どもの手から

逃げていくこともあります。思いのままにならない、その体験で、子どもは動物にも意思があると知るので。あきらめる子もいれば、くやしう思っている子もいます。そういうときには、もう一度スタッフが、抱き方や接し方を教えます。

子どもたちの多くが、ウサギは白い毛色で赤い目のイメージをもっているせいか、白いウサギを抱きたがる子が多いのですが、茶色や、黒、バンダ柄の「色ウサギ」も楽しんでもらいます。

お礼として、子どもたちから絵を見せてもらった、手紙を受け取ったりしますが、その多くはやはりウサギです。童話などにも出てくるからでしょうか。今も昔も変わらずの人気者です。

鳥類としては、アヒル・チャボ（ニワトリを小型化したもの）・ヒヨコがいます。鳥類が特に好きな子は、徹底的に興味をもちます。アヒルは四キログラムくらいの体重がありますが、一所懸命抱き上げ

ようと、後ろからついてまわります。チャボも同じことがいえます。

ヒヨコも子どもたちに人気があります。小さくて、綿のように温かいヒヨコは、ケースの中に一羽ずつ入れて見せますが、子どもに触らせたり、抱き上げたりさせることもします。子どもの手のぬくもりというか体温が伝わると、ヒヨコはおとなしくなります。また、子どももヒヨコの温かさを感じて、優しく見守ろうとします。

「ヒヨコさんが今寝てるから、静かにして」と、子ども同士でささやき合う声さえ聞こえます。

暖かい五月から十一月には、クサガメを連れていきます。大きなタライの中に四匹入れて、自由に触らせるのですが、あるとき時期がずれて持つて行かないことがあります。そのときは、クサガメを楽しみにしていた子がとても残念がっていました。

自分たちが思っている以上に、子どもたちが楽し

みにしていただけることがうれしく、また、そういう期待に応えるような動物園にしたいと思います。

移動動物園は、基本は二時間で、延長も可能ですが、二時間あつても子どもたちは物足りなそうにします。また、それより長いと子どもたちは飽きて、遊具で遊び始める光景がしばしば見られます。「楽しかったね。また動物さんと遊びたいな」と思えるくらいの時間がよいと思います。

二時間のふれあいは、動物と子どもとのコミュニケーションでもあるのです。日常生活では見ることもしふれることもできない動物との対面が始まり、命あるものの体温を感じ、呼吸を知り、いとおしさ、かわいさ、そして時には怖さを体験させることの大切さを、毎日感じています。

月日が流れ

昨年、ガス工事を頼んだときのことです。その工

事に来たスタッフの中に、仕事がいねいであいさもさわやかな青年がいました。その青年は、わが家の動物を見て驚きを隠せなかったこと、そして幼稚園時代に園に動物が来たことを話してくれました。

そうなんです。その青年は、以前私たちが伺った園の園児だったので。月日は流れて、社会に貢献できる大人になっていたのです。うれしいことです。少しでも思い出になっていたのですから。

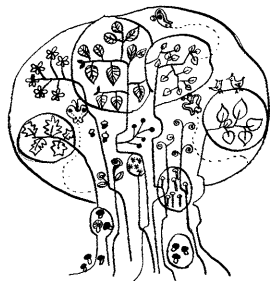
この仕事を始めて多くの人とかわつてきました。動物のことを教えることもありますが、子どもたちからも生きるパワーを充分もらい、また、先生方から教育・しつけを学ばせていただいています。それらは財産であり宝でもあります。

動物相手の仕事ですので、より多く件数はこなせませんが、これからも今までどおりの形で、人にも動物にも優しくやっていきたいと思っています。

(神奈川県川崎市・福田牧場)

木の心

小山千秋



木に仕える樹木医となつてから、私が少しずつ耳にした「木からのメッセージ」を一部紹介します。

木のつばやき

毎日よく雨が降りますこと。風も吹き、冬になると雪も降り、海も見えて静かなよい所です。あちらこちらに私の仲間がいます。ちよつとのつもりでずいぶん長く眠ってしまい、幾つになつたのかもわかりません。でも、台風だけは困ります。台風は二百十日(九月一日ころ)には必ずやってきて、あたりを荒らしまくるのです。また一年に何十回も暴風雨が

あり、そのたびに枝を折られたり、梢がふっ飛んだりします。雨は山を駆け流れ土砂を押し流すので、どんどん根を伸ばしてしっかりと岩盤にしがみ付いて身を守らなければなりません。聞くところによると、人間という動物が来て山を荒らしているのだそうです。でも、こんな上の方まで来ないでしょう。

子どものころ、親から「真つすぐに伸びるから杉まきなんだよ」と言われたことがあります。でも私は、どうしてこんなにズングツチョズングリ(ズングリ体形)なのでしょう。谷間のスマートな仲間がうらやましいです。長生きだけが私の取りえです。

ある日、人間が私たちを切りに来るといいうわさが伝わってきました。何でも幕府に献上するコケラ茸（板を重ね合わせて屋根をふく）の板を作るとかで、下の方では石（木材の容積単位）の大きい木から切り始めているそうです。

そのうち本当に人間がやってきて、木に斧で印を付け始めました。私の所へもやってきて、

「こいつあたいけど、チャッチャくて石がねえ、石ころみてえで硬くて駄目だ」

と行ってしまいました。幸か不幸か安堵したものの、切り出される仲間を見送ると淋しいものです。

年を経て、また人間たちがやってきました。世界遺産の旗を持って近づき、「これだこれだ、世界で一番古い縄文杉だ」と言って縄を巻いて帰りました。役にも立たない老骨が、世界遺産だなんて恥ずかしいことです。木の気も知らないで勝手なものです。

そのうちに人がわいわいやってくるようになり、

根元を踏み固めるは、触るは、たたくは、毎日たまるストレスに困り果てました。

間もなく周りに木道が作られ、看板が立てられました。こうなったら居直って、来る者を迎えてやろう。心を据えたら気が楽になりました。

年をとると体のあちこちにあかやほこりがたまりますが、いつの間にか二十種類もの草木が寄生し、花を咲かせて虫を呼んだり鳥が来たりして、まさに雲上の小さなパラダイスになりました。

ある虫の話

里山では国蝶オオムラサキの幼虫が、おいしそうにエノキの葉を食べています。その様子は、乳児を抱いて授乳する母親の安らぎに似ています。一所懸命食べていると、やがて、

「もうやめてね」

とサインが出て葉がまざくなります。すると虫は、

ほかの所に食べ替えます、これを何度か繰り返すうちに、虫喰い葉（穴だらけの葉）になります。

すると虫は、ほかの葉に移ってまた食べ始めます。葉の働き（同化作用）を妨げない心遣いでしょうか。

どの虫にも食性（食べ物に対する習性）があり、食べる植物は決まっています。植物は皆毒で身を守っていますから、やたらに食べると中毒して死んでしまいます。食性の植物については、免疫を与えられていると考えられます。

虫が増え過ぎると、鳥が食べて調整をしてくれます。つまり虫は、餌となって鳥を養っているのです。これが生態系（自然界で生物が生きていく仕組み）で、「食物連鎖」ともいわれています。植物は生態系の底辺を担う役割を果たしているので自然の母ともいわれています。生態系の頂点に立つて自然の恵みを存分に享受している人間が、更に利益を追求して、森林や海洋資源を乱獲し、生態系を壊して

いることは誠に遺憾なことであります。

木の悲しみと喜び

私の名前はアメリカヤマボウシなのに、勝手にアメリカハナミズキと呼んだり、一番嫌いな道路に植えられたり、何と運の悪いことか。これではいつまで生きられるかわかりません。公園の水辺で半日陰の所に植えられた仲間には、爛漫の春を謳歌して喜んでるのに。

日本の国花サクラは、吉野山に自生（好きな所に一人で育つ）するヤマザクラで、雨が多くて水はげがよく、しかも日当たりのよい斜面に群生しています。

八代將軍徳川吉宗公は、各地の堤防に植えさせて名所をつくり、木を喜ばせながら人々も楽しませる花見を奨励しました。このことは、集まる人に土手を踏み固めてもらう結果となり、一石三鳥の得を取めたといわれています。

現在のサクラはヤマザクラの変種、ソメイヨシノという品種で、本当に世界美しい花です。

箱根や日光の旧街道に残る並木は、史跡として保存されていますが、今日の街路樹は葉の付いているうちに丸坊主に切られるので、切口が瘤状になっています。木から嘆きの声が聞こえてきます。

木の怒り

慈しみ深い母なる木でも、時には憤然と切れることがあります。狭い歩道に植えられ、苦しまぎれに道路の舗装を押し上げたり、根元の石仏を抱え込んだり、校庭の鉄棒に噛みつき、飲み込んだ例もあります。木は成長を邪魔するものに対して、正しく強い自然の力を行使しているのです。

木の文化

ヨーロッパの石の文化に対して、日本には木の文

化があります。これを象徴する法隆寺の建築や仏像が世界遺産に登録されたことは、伝統技術の粋と歴史の意義が評価されたものと思われれます。

建立千三百年、昭和の大改修を仕切った宮大工棟梁の故西岡常一氏は、著書『木に学べ』（小学館）で、「木も人も環境に生まれ長所を持っている。これが癖である。多くの職人と多くの木の癖を組み合わせて、より丈夫で美しい建築を仕上げるのが棟梁の責務である」と言っています。

癖のある木は素直な木よりも強く、適所にあつては何倍もの力を発揮します。

樹齢千三百年のヒノキの柱が、千三百年間法隆寺の堂塔を支えていたことが、改修で確認されたことも述べています。

よい建築には、職人の魂と木の心が、融和してこもっています。これが、人の心に静かな感動と合掌を誘うのではないでしょうか。

公園の木

一九〇三年、日本最初の西洋式公園として日比谷公園が誕生しました。設計者の本多静六（一八六六～一九五二／林学博士・東京大学教授）は、百年後の東京の都市環境（人口・文化・国際化・交通）を予見して設計しました。

馬車や自動車が並んで走れるほどの園路、広い芝生にきれいな花壇、広場や音楽堂、図書館、運動場、動物園、池の噴水、レストラン、公会堂など、当時の日本人には奇想天外の別天地であったと思われるます。

予算の都合で一メートルくらいの木を植えた当時の写真は、広い苗木畑のような感じがして、中に一本だけ樹齢四百年の大木が植えられました。その名も「首かけイチョウ」と名づけられ、標示板にその由来が説明されています。

百年の間に、木は順調に成長して、首都東京の顔として役割を果たしています。

明治神宮の森

明治神宮神苑の造成は、国家の事業として執り行われ、設計には本多が指名されました。

設計に先立ち、総理大臣から神宮にふさわしい針葉樹の森に、全国からの献木十万本を植えるようにとの要望があり、樹種については本多の林学的思考とかなりの隔たりがあったようです。しかし、学者としての信念を貫き、説得に努め、ようやく総理の了解を得ることができました。

植栽設計と管理計画の概要は、

- 一、百年後の東京は、世界有数の国際都市になり、公害都市になる。
- 二、代々木の地を好み、都市公害（大気汚染）に耐えられる木を植える。

三、邪魔・危険（倒木・枯れ枝落下）な場合以外は、一切木に触れない。

四、落葉・枯れ枝は、すべて森の土に戻す。

ちなみに新しく植えられた木の種類は、クスノキ、シラカシ、スタシイ、イヌツゲ、サカキなどの常緑広葉樹で、公害に強いエリートたちです。

これらが、百年にわたって演じた成長のドラマが現在の森です。人工の植栽林が自然淘汰されて、新しい自然林に変わることを「天然更新法」といいます。大都市の人工林としては、学術上貴重な森といわれています。

日比谷公園を「新劇」にたとえれば、神宮は「歌舞伎」の森ともいえます。舞台役者は照葉樹といわれる暖地性の常緑広葉樹で、葉の表面に光沢があり、最も公害に強い木で、神宮には最適な木だったのです。

法隆寺を支える木も、匠の心と技によって世界遺

産の重責を担っています。このように、木は生きて一生、枯れて一生、二生の働きをして朽ちていきます。

木の教え

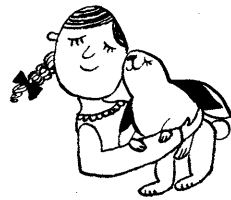
昭和中ごろまでの田舎の子どもたちは、物心ついたころには、庭や道端で草や虫と遊び、学齢期には木登りや魚とりをしたり、小鳥やウサギを飼ったり、川や海での水浴びなど、自由奔放な遊びに育てられたようなものです。私もその中の一人ですが、今にして思えば、自然は、学ぶ者に対して無限の教えを授けてくれています。

私は、木にお仕えする樹木医、自称「木人間」ですが、尊い木の教えを伝える通訳として、「木の心」を伝え、よりたくさんの「木の恵み」を、一人でも多くの方が受けられるよう努めたいと思っています。

（樹木医）

動物と生活する中で感じたこと

池田 佐和子



安部幼稚園は、横浜市郊外の住宅街の中にあります。幼稚園に入ると広い園庭があり、枕木の階段を登った上の園庭には、ヤギやウサギ、チャボのいる

牧場があります。その奥には「森」と呼んでいる広い雑木林が広がっています。園庭や森には、サクランボやビワ、ミカンなどの果樹や子どもたちの畑があり、四季折々の味覚を楽しむことができます。果実や花々、木の葉の移り変わりなど、自然を身近に感じながら生活しています。

また、ヤギやウサギ、チャボの飼育をしており、毎年の年長組が掃除や散歩、餌やりなどの世話を

「動物係」として行っています。動物係は子どもたちにとって、年長組になったらできる、楽しみであり、憧れとなっています。

この年、私が担任したのは年長組（五歳児）三十一名でした。四月にヤギの出産から新しい命との出会い、二学期にはウサギの看病と死を経験し、動物の命を肌で感じた一年でした。また、動物と接する子どもたちの姿から、優しさや愛情、子どもたちの成長を実感した年でもありました。

そんな、動物と子どもたちのかかわりを、書いてみたいと思います。

子ヤギとの出会い

四月初めに、ヤギのこゆきに赤ちゃんがいることがわかり、年長組になったばかりの子どもたちにそのことを伝えました。小さい組に「静かにしてね」と教えたり、こゆきの大きなおなかを見たりと、こゆきを見守りながら、生活がスタートしました。進級したばかりで緊張気味のYは「こゆき見てくる！赤ちゃん生まれたかな」と、毎日大好きなこゆきの様子を見に行くことを楽しみに登園してきました。

そしてついに四月十九日、二頭の子ヤギが生まれました。ぜひ、生まれたばかりの姿を見せてあげたいと思い、子どもたち一人ずつに小屋の中を見せることにしました。

息を潜めて、そーっとのぞく子どもたち。子ヤギはお母さんの横で丸まっていて、あまりよく見えないうのにもかかわらず、振り返った子どもは目を輝か

せて「いた！」とにんまり。何ともいえないうれしそうな表情をしていたのがとても印象的でした。

子ヤギの名前を決めるときに、「名前は願いを込めてつけるんだよ」と話したことをきっかけに、自分の名前にはどんな願いが込められているのか、家で聞いてくることにしました。

それは、自分を大切に思い、願いを込めて名前をつけてくれた両親や祖父母の温かい気持ちに触れるよい機会となりました。

また、二頭の子ヤギのしぐさや表情、そしていつでも見飽きることのない愛らしさは、自然と子どもを笑顔にし、「かわいいね」と共感し合う、子ども同士の関係も温かく和んだ雰囲気にしてくれたように思います。

何をしていてもかわいいと思える子ヤギとの出会いは、動物のことを大好きになり、大事に思う、とても大切な出会いだったと思います。

ウサギの「もも」との別れ

六月中旬、隣のクラスの子どもが、ウサギのももこの足から血が出ているのを見つけ、以前にも、お世話になったことのある動物病院の先生に診てもらうことにしました。その結果、左後足の二か所に腫瘍ができていて、足を切らないことは長く生きられないとわかりました。「ももこは足に悪いおできみたいなものができて、その足を切らないと長生きできないんだって。どうしたらいいと思う？」と子どもたちに相談すると、「足を切るのかわいそう」「死んじゃうよりも切ったほうがいい」と子どもたちなりに真剣に考えていました。

「足を切ると、三本足になっちゃうんだよね。そうするとどうなるかな？」と問いかけると、Mが両手をつき、片足を浮かせて三本足のウサギになったつもりで動き始めました。その姿に刺激されて、全員

でやってみると「ジャンプできる」「動ける」とわかり、足を切るのはかわいそうだけれど、死んでしまふよりも手術をもらったほうがいいということになりました。

数日後、手術を終えてももこが帰ってきました。「ももこが帰ってきたよ」「門のところにいる」。

帰ってきたことを口々に伝え合いながら迎えに行きました。ケージに入っているももこを囲みながら、「ももこお帰り」「もう大丈夫だよ」「がんばったね」と、ももこに優しい言葉をかけ、温かい雰囲気で見送る子どもたちと、頑張ったももこの姿を見て、私自身思わず胸が熱くなりました。

ところが夏休み中に、傷口に炎症を起こし、ももこは再入院してしまいました。夏休みが明けて、登園した子どもたちが、「ももこがない。どうしたの」と聞いてきました。夏休み中のことを話すために年長組全員を集めると、ももこのことを伝え聞い

て、保育者の話を真剣な表情で待っている子どもたちの姿に私は驚きました。それだけみんなが、**もも**このことを大事に思い、心配しているのだと改めて気づきました。そして、夏休み中に入院をしたことを伝え、**ももこ**が病院から帰ってきてからは、ばい菌が入らないようにうんちやおしっこをしたら、すぐにシートを替えるから知らせてほしいと、子どもたちができることを話しました（シート替えなどは衛生面を考え、保育者の手で行っていました）。

そして退院後、**ももこ**は年長組保育室前の廊下で様子を見ることにしました。園庭の小屋より身近な場所にいることで、子どもたちはいっそう、**ももこ**に気持ちを寄せて生活するようになりました。

「**ももこ**、おはよう」。登園時にさりげなく声をかける子。じつと様子を見つめる子。**ももこ**を囲んでおしゃべりする子たち。おしっこやうんちが出る、すぐに誰かが気づき教えに来ました。また、**も**

ももこの好きなキャベツやニンジンの家から持ってきたり、ヨモギやビワの葉が体によいと知り、「**ももこ**のお薬取ってくる」と言って、友達と誘い合って森に取りに行く子たちもいました。

そんな子どもたちの優しさを受けながら元気にしていた**ももこ**が、九月末のある日、ぐったりとして元気がありません。息が荒く、体が傾いている状態でした。子どもたちもその様子に気づき、心配しながら降園しました。病院で診察してもらうと、肺に腫瘍の転移が見つかったのです。

「肺っていう息を吸うところに移っちゃって、もう長く生きられないんだって」と子どもたちに伝えると、「**ももこ**かわいそう」「だから苦しうだったんだね」「自分だったら怖い……」など、それぞれの言葉や表情から、**ももこ**の気持ちを察しながら受け止めていることが伝わってきました。これからは**ももこ**を病院にお願いするか、そばにおくかどちらが

よいか相談すると、**ももこ**もきつと、子どもたちの近くにいるほうがうれしだいろうということで、引き続き子どもたちで、世話をするにしました。

ニンジンに薬をつけてあげたり、スポイトで水を飲ませることになり、**ももこ**の様子を目の前で見るようになってから、「きのうよりニンジン食べないね」「目が少し閉じてる」「きょうは、耳がぴんとしているから元気なのかな」「耳に線（血管）が見える」など、子どもたちは**ももこ**の日々の変化や細かいところにも気がつくようになりました。動物病院の先生から、バナナやナシは栄養があつてよいと教えてもらうと、お母さんに頼んで持つてくる子もいました。**ももこ**が食べやすいようにと、自分でニンジンやナシを切ってくる子どもたちの心遣いに、成長を感じうれしく思いました。

また、「**ももこ**の具合はどうですか」とお母さん方から聞かれることがあり、子どもたちを通してそ

れぞれの家庭でも、**ももこ**のことが話題となり、両親やきょうだいなど、家族を巻き込んで一緒に**ももこ**を心配していたことが伝わってきました。

転移がわかつて一週間後、**ももこ**は亡くなりました。真剣な表情や涙を浮かべている顔。それぞれに**ももこ**をじっと見つめ、子どもたちはお別れをしました。

ももこのお別れは悲しい出来事でしたが、ふとしたときに「**ももこ**、げんきかな」「空でも**ももこ**が遊んでる」と話す子どもたちの中には、大好きな**ももこ**の生活が残っているのだと感ずることができました。幼稚園の思い出を絵に描いたときには、**M**が**ももこ**の絵を描き、「ナシ、あげてるところ。**ももこ**こうれしそうだった」と話してくれました。自分の思いや優しさが動物にも伝わるのだと子どもたちが感じられるかわりをもてたことは、子どもたちにとって、とてもうれしい体験であり、自分と同じ

ように動物にも気持ちがあることを感じられたのではないかと思います。

一年間を通して動物とたくさん触れ合うことを大切に考えて、動物係に取り組んできました。ヤギを森に連れて行ったときには、友達数人と綱を持ってもひきずられてしまうヤギの力強さを感じたり、元氣良くジャンプをしたことに驚いたり、子どもたちは毎回新たな発見や楽しみを見つけていました。

チャボやウサギとのかかわりも、初めは怖くて近寄れなかった子が少しずつ慣れていき、抱っこができるようになる。そのことで、フワフワの抱き心地や温かさを知り、もっと動物のことが好きになっていくのだと感じました。また、うんち掃除など少し嫌なことでも、友達と一緒に頑張れたり、誰かが世話をしなくてはならないことを理解して、大事な動物のために自分たちがやってあげよう」と、責任

をもって取り組む姿が見られるようになっていきました。

新しい命との出会い・死を体験することは日ごろにはないことですが、新しい命の愛らしさや大切な動物とお別れしたときの気持ちや、隣にいる友達や家族と一緒に感じ、動物たち、そして自分たちもたくさんの人に守られて生きているのだと知る貴重な体験になりました。

この体験を通して、自分のことのように真剣に考え、思いやりをもって動物たちとかわれるようになった子どもたちの姿に、改めて身近に動物がいることの大切さを実感しました。これからも、動物のしぐさやかわいさと感じたり、不思議に思う体験や、自分たちが動物の命を守っているのだと感じられるよう、子どもたちの驚きや発見、喜びに寄り添って、身近に動物を感じる生活をしていきたいと思っています。

(安部幼稚園 教諭)

あ る 日



撮影・平野 清



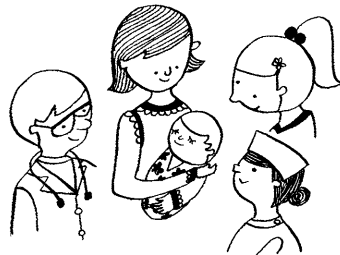
子どもとその家族の 幸せを願い続けて

乳幼児精神保健の風

今年の八月一日から五日にかけて、神奈川県横浜市にあるパシフィコ横浜において、アジアでは初めての世界乳幼児精神保健学会（以下WAIMH）世界大会が開催されます。世界大会としては十一回目で、そのテーマは「赤ちゃんに乾杯！」です。

今回の日本組織委員会会長の渡辺久子氏（慶應義塾大学小児科学教室）は、昨年夏に開かれた明治安田こころの健康財団の外国講師招聘講座&児童思春期講座への挨拶文の中で、このテーマの趣旨は、「障がいや

ダーリンプル・規子



世界乳幼児精神保健学会 (WAIMH)
<http://www.waimh-japan.org/>

病気をもって生まれた赤ちゃんも健康な赤ちゃんも、等しくかけがえない命として祝福しよう。そのような社会を目指し、乳幼児にかかわるすべての人が力を合わせよう」であると述べています。

その根底に流れているものは、一九九五年にアジアにおいては初めての第二十一回世界幼児教育・保育機構（OMEP）世界大会が同じ会場で開催された際に、津守眞氏が世界平和と保育への理想を語られたものと共通なもの、つまり、赤ちゃんや子どもとその家族の

幸せを願ってみんなで支え合っていこうということの
ように思います。

私自身は一九九五年時の興奮や感動を思い起こしな
がら、この八月を非常に楽しみにしています。

では、この乳幼児精神保健とは何なのか、それはど
のように始まり、広がっていつているのでしょうか。
「乳幼児精神保健」という考え方の流れ自体は、他国
から始まったので、まずは世界の動きに目を向けてみ
たいと思います。

乳幼児精神医学の誕生

精神医学というと、何だかちよつとわかりづらい、
難しそうなものと思いましたが、簡潔にいう
と、心に関する医学ということです。海外では、
この心に関する医学は、早くから発達していつていま
す。渡辺久子氏によると、第二次世界大戦以降に、戦
争を直接体験した精神科医たちが、具体的に解決して

いかなくはいけない心の問題を抱えている人たちが
目の前にし、取り組んでいく中で、実践的でリアルな
精神医学が発達していきました。

その現実に取り添った動きの中で、それぞれの地域
で悩みや問題を抱えている人たちを支えるための地域
精神医学の実践が始まりました。地域の保健婦たちが
家庭訪問を通して、各家庭の母親や赤ちゃんの現状に
向き合っていくこともその一つでした。たとえば、ア
ルコール依存症のお母さんと出会い、そこで誰からも
世話を受けていない赤ちゃんに気づき、関心をもって
いく、ということ。それらは家庭精神医学の実践
につながっていくものでした。

また、同時に子どもに焦点をおいた精神分析学も発
達し、アンナ・フロイト（イギリスの精神分析家）は
実際に戦災孤児を相手にしながら、外的な状況が子ど
もの発達に与える影響を、ジョン・ボウルビー（イギリ
スの医師・精神分析家）は社会に不適応な少年や非行少

年たちとかかわっていきながら、アタッチメント理論を、メラニー・クライン(オーストリア出身の精神分析家)は、子どもの精神分析を行っていく中で子どもの内世界的の中で起こっていることを掘り下げていきました。そこから、乳幼児期の心は今の自分ともつながっていて、心の奥底に沈んでいたのが、何かのきっかけで、また表出するという共通認識が生まれてきました。そして一九七二年には、セルマ・フライバーグ(アメリカのソーシャルワーカー・精神分析家)が「赤ちゃんのための精神医学」という概念を導入しました。

乳幼児精神医学から乳幼児精神保健へ

一九八〇年に児童精神医学のメンバーや、アカデミックな人たちが中心になって、世界乳幼児精神医学会(以下WAIPAD)が組織されました。この会は、現場の人たちにも心強いものでもありましたが、アカデミック色が強いこともあり、一方で、看護婦や保健

婦など、現場の臨床家でつくっている国際乳幼児精神保健学会(以下IAIMH)もありました。

WAIPADのメンバーが、現場の人とのつながりを通じて、赤ちゃんとお母さんの生活感覚に近いものを考えていく必要があると、IAIMHに歩み寄り、そして、WAIPADとIAIMHが合流して、現在のWAIMHが出来上がりました。

ここでは、乳幼児精神保健とは赤ちゃんの心の健康を守る学問と実践であるという考えを基本にしています。そして、赤ちゃんの心の健康を守るためには家族一人ひとりの幸せが守られる必要があること、そのために赤ちゃんとお母さんの間の関係そのものに焦点を当てることが重要であるとしています。さらにそのことについて研究をし、心の健康を守るための予防やさまざまな問題を抱えている親子への支援について、多職種の専門家が職域を越えて力を出し合っています。

最先端の研究と、目の前の個々の人とかかわる臨床

とが車の両輪のように働き合って、赤ちゃんと家族の「生きる喜び」を模索し、未来の世代の子どもたちの幸せにつなげていこうとしている会で、世界の各地の現場に直接足を運んで、他機関と協力して活動しています。元会長のゴーチエ氏は、この会についてシンプルに「今生きている幼い仲間のことを考える輪にした」と、言っていたようです。

“FOUR WINDS”の誕生とその流れ

さて、そのような海外での動きの中、日本にはどのように乳幼児精神保健の風が吹いてきたのでしょうか。どこの国でもそうでしょうが、日本でも昔から、現場で赤ちゃんや子どもとその家族に対して一所懸命支援をし、その育ちを応援している人たちは多くいます。保育士や幼稚園教諭はもちろん、保健師、小児科医、臨床心理士、助産師、また、専門の職種にはついていなくても、地域のつながりの中で応援してくれて

いる人たちもいます。しかし中には、自分たちとは違う考えの持ち主が周りに多く、孤軍奮闘しては疲れていた方々がいたということも、実際にはありました。

そのような中、一九九六年七月フィンランドで開催されたWAIMH世界大会へ参加した人たちから、日本でも各地で乳幼児精神保健に取り組んでいる人たちとの連携を目指そうと、乳幼児精神保健研究研修会(以下FOUR WINDS)が結成されました。フィンランドのラップランド地方の人たちがかぶる帽子に四つのトンガリがあるので、そのトンガリは、東西南北の四つの風(FOUR WINDS)を表しています。ラップランド地方の人たちは、吹いてくる風を肌で感じながら方角を定めて先へと進んでいくそうですが、そのように私たちも進んでいければ、という思いからFOUR WINDSが会の名称としてつけられたそうです。

そして、一九九七年、高知で第一回目のFOUR

WINDS全国大会が開催され、ジョン・リチャード氏がイギリスより来日し、生態行動学と愛着について講演しました。その後、長崎、岩手、山梨、東村山、鳥取、富山、佐世保、宮崎、そして二〇〇六年には浜松と、毎年日本各地に外国講師を招聘し、愛着、乳幼児精神保健診療、間主観性、「共感の根っこ」教育、親子乳幼児治療、赤ちゃんのコミュニケーションの音楽性などの話をしていただきました。

同時に、日本国内の現場の方々の話を聞く機会を設けながら、乳幼児精神保健の風を各地に起こし、そこで頑張っている人たちと出会っていきました。また、アジアという視点も大事にしていて、彼らとの交流もありました。

二〇〇六年秋、FOUR WINDSは乳幼児精神保健研究研修会から、乳幼児精神保健学会と名を変え、FOUR WINDSとしては十一回目の、学会となつてからは初めての大会を昨春秋、栃木で行いま

した。FOUR WINDSの大会の特徴は、分野にとらわれず、子どもにかかわる人たちが参加しているということでしょう。先程述べた職種のほかにも、弁護士、主婦、皮膚科医、児童精神科医、乳幼児の研究者らが参加し、どの方たちも、子どもとその家族の幸せを願っています。

ある人たちは、子どもたちをいっぱい甘えさせることで、その育ちを支えています。周りからはそのようなやり方に一部批判もあるようです。しかし、会に参加することによって、自分たちの考え方ややり方は間違っていないかった、あるいは、さらにこんなふうに支援する方法もあった、と自分たちがかわっている家族を包んで支えるのと同じように、この会の人々に彼らが包まれ支えられ、エネルギーをもらって、各現場に戻っていきます。

また第十回大会では、フィンランドから来日したトゥーラ・タミネン氏の話から、各領域の方々が、そ

れぞれに自分たちの現場ではどのようなことができるのか、具体的に考えていこうとエネルギーをもらいました。その話に少し触れたいと思います。

ヨーロッパでの

早期促進プロジェクトというサービス

人口約五二〇万人のフィンランドは、決して子どもが多いわけではなく、二〇〇七年時は、一世帯に子どもが平均1.4人となっています。そして、夫婦共働きの人たちがほとんどです。ただし、家族政策では、①子どもにも子どもを産み育てる親にも、安全で安心な環境を提供し、物質的・心理的支援を保障する ②子育てに参加するための機会をそれぞれの親に等しく伝える ③できるだけ早い段階で予防的介入をする。以上を考えた下、育児休暇の制度が整っていて、出産をした母親は育児に専念することができ、父親も同じように育児に携わることができるようになっていきます。そ

れぞれの乳幼児と家族をいねいに支援していると感じられます。

特に三つ目に挙げられた「早い段階で予防的介入をする」方法として、ヨーロッパ五か国でされた研究及び実践が、ヨーロッパでの「早期促進プロジェクト（EPPP）サービス」です。それは、小さい子どもをもつすべての家族へのサービスであり、早期親子交流をサポートするものであり、親の自尊心や問題解決能力を高めるのをねらいとしています。

具体的には、妊娠中から母親にかかわり、母親の話をも親身になって聞きます。それは出産後も同じで、そこからどのようなサポートが必要か、そのニーズがどのくらいあるかを見ていきます。そして、必要に応じて、親としての能力に焦点を当てた予防的介入（親のカウンセリングや、手助けの手順、親とのパートナーシップの取り方）や、早期親子交流に関する予防的介入（親子のやりとり、特に視線や話し方、扱い方、相

互性をどのように評価していくのか、上手なやりとりの援助、モデリング、その他の具体的援助）を、専門家と連携を組みながら行っていきます。

早期促進プロジェクトにおけるトレーニング

このプログラムでの大事な点は、保健師・看護師に対するトレーニングです。妊娠中あるいは出産後の母親、父親、そして乳児にどのような姿勢でかわかっていくか、母親の態度や行動の背景をどのように感じとり、どのように対応していくのか、そのことを一つひとつといねいに、トレーニング期間の中で行っていきます。

この話の後、興味のある質問がありました。それは、このトレーニングは保育士のためのものはないのかというものでした。これは、看護師や保健師のみでなく、日常的に乳幼児に接していく人たちすべてが、このトレーニングを受ける機会が与えられたらさらに幅広く、

子育て家庭を支援できるのではないかと考えるからだと思います。なぜならば、そのトレーニングの基本には、人間を人間として尊重し、「母親・父親が基本的に育児をする」ことを援助する、という考え方があからずからです。

支援者が親を尊敬し、親に寄り添い、親と共に悩んで一緒に歩んでいく。そのことによって、乳幼児も守っていけるという考え方は、それを具体的にプログラムとして行っているわけです。

もちろん、フィンランドやヨーロッパと日本では、文化や歴史などの違いはありますが、この根本の部分には人間として共通しているもので、そのことを感じているからこそ、日本の子どもにかかわっている専門分野の人たちが、この話を自分たちの方へ引き寄せ、自分たちの分野での可能性を模索する機会となっているように思います。

最後に

第十回のバリで行われたW A I M H世界大会の中で、ダニエル・スターン氏は、現在、心理学の世界では、一人心理学から二人心理学へと重点をおいていること、そして、その中で特に、「今・ここ」の瞬間が大事であること、相手との心の中でのやりとりが、言語・倫理などの心の発達の基礎であり、それゆえに「雰囲気atmosphere」に焦点を当てていくことが非常に大切であることを述べました。

また、世界中において、問題を抱えている人たちと接している人たち（それは、専門家であったり、日常にかかわっている地域の人でもあるわけですが）に共通している態度として、①話をよく聞く ②時間をかける ③支える態度 ④オープンな心をもつ ⑤病気も大変だけれど苦悩はもっと大変なことであるという考え方をもつ、という調査の結果が出ているという

ことを述べました。そこには、世の中のできるだけ多くの人たちが、この五つの態度をもてるようになれば、子どもも大人も人として生きやすい社会になるだろうという思いがあるように感じます。

私たち大人も、言葉でのコミュニケーションの世界のみでなく、非言語的コミュニケーションの世界で生きています。乳幼児に関しては、なおさらです。人間が人間としてこの世の中で幸せであるために、また子どもが子どもらしくいられるために、これらの実践と実践が広まり、そして深まっていくようにと願っています。また、自分もできるところから始めようと、目の前にいる二歳のわが子を見つめながら思っているところです。

（中部学院大学短期大学部 幼児教育学科 専任講師）

参考文献

清水将之、渡辺久子ほか著『赤ちゃんのこころー乳幼児精神医学の誕生』星和書店（二〇〇一）

「おもむいてくれないのー」考

戸田雅美

学生が、ある幼稚園の三歳児のクラスで保育を継続的に観察し、記録をとっていた。そして、次のような記録を持って、ゼミにやってきた。

幼稚園の三歳児、六月のある日の記録

園庭で遊んでいると、アゲハチョウが飛んでくる。アゲハチョウを見つけた子どもたちが、喜びの声を上げながらアゲハチョウを追いかけ始める。それを見た保育者は「たんぽぽ組さんと追いかけてっことしてみたいね」と声をかけ、子どもたちと一緒に追いかける。

ところが、しばらくすると、アゲハチョウは園庭の境のフェンスを越えて、外へ出て行ってしまった。それまで、笑顔でアゲハチョウを追いかけていた子どもたちの動きは止まり、急に寂しい表情になる。すると、保育者が突然大きな声で、

「チョウチョさん、ずるいじゃない！」

私たち飛べないんだから！」
と言いつつ、驚いてアゲハチョウと保育者を見ている子どもたちに、「ねー！」と声をかける。子どもたちも、そのとおりにいうようにうなずく。そしてなおも、空高く飛んでいってしまったアゲハチョウを求め

て、残念そうにしている子どもたちに、「チヨウウチヨさん、また来るよ」と話しかける。

この学生は、「もし、私だったら、子どもたちの寂しそうな表情を見たら、きっと『残念だったね』としか言えなかったと思う」と言う。聞いているほかのゼミ生たちも、皆同じだと言い、この保育者の「ずるいじゃない!」という言葉はすごい。どうして、こんなことが言えるのだろう」と話が盛り上がる。

私は、その話の盛り上がりにつき合いながら、「でも、どうして『残念だったね』ではだめなのか? 子どもたちは、寂しそうな表情をしていたのでしょ?」と問いかけてみる。問いかけている私に、用意した答えがあるわけではない。私自身も「ずるいじゃない!」というこの保育者の言葉のセンスに感動しながらも、でも、なぜ「残念だったね」よりよいと思うのか、どこが違うのかと、自問している。

記録を提出した学生は、記録をしなすでに、この意味を考えてきたのだろう。

『残念だったね』は、子どもの姿を外側から客観的に見た人の言葉であって、今、アゲハチヨウを追いかけていて、逃げられてしまった子どもたちの気持ちの内側に寄り添っていないと思うんです」と言う。さらに、倉橋惣三の『育ての心』（フレール館）の有名な文章である「心もち」を引用して、「心もちとは心もちである。その、原因、理由とは別のことである。ましてや、その結果とも切り離されるものである。(中略) その子の今の心もちにのみ、今のその子がある」という、まさに、その心もちに寄り添っていると思うと言う。学生なりに、何とか、そこで感じた自身の思いを解き明かしたいと、文献にあたってきたらしい。その言葉には、なかなかの説得力がある。

確かに、「寂しそうな表情」というのは、外側か

から見えることであつて、アゲハチヨウと追いかけて遊んでいる最中の心もちは、「寂しい」ではないだろう。でも「残念！」という気持ちはないとに限らない。すると、別の学生が、「残念！」と「残念だった」は違いますよね」と発言する。やはり、「残念だったね」は、どこか子どもものの心の内とは、離れたところからの言葉なのかもしれない。

振り返ってみると、私たちは、よく「残念だったね」と、いかにも子どもものに寄り添った言葉として使うような気がする。でも場合によっては、寄り添ってはいいても、子どももの心もちは、触れていないかもしれない……などと議論は白熱する。

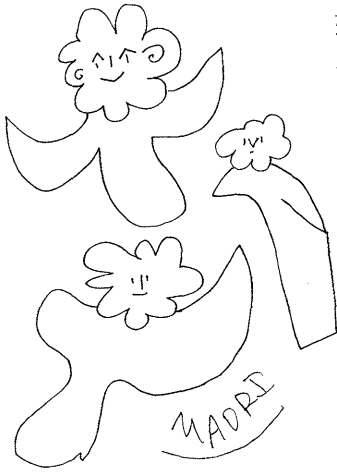
「それにしても、この保育者はどうして『ずるいじゃない！ 私たち、飛べないんだから！』などと言えるのだろうか？ 見ていてどう思う？」と記録者への質問。ずっとこの保育者を観察しているその学生は、「とても自然に見えるんですよね。だから、こ

の先生なりに、三歳児になりきっていて、そこから出てくる言葉のようにも思えるのです」と答える。「多分、その先生に伺つても『自然に……』と答えるような気がする」と、その保育者を知る私も同意し、この日のゼミの時間は、そこで終わりとなった。

その後も、私の心の中では、この議論が気になっていた。もしかしたら、子どもたちは、「アゲハチヨウは飛ぶものだから、仕方がない」と思っていたのかもしれないと考えるからだ。少なくとも、この瞬間に本気で「ずるい！」と思う子どもは多くないだろう。その意味では、この言葉は、そのときの子どももの「心もち」をとらえたものではなかったといえそうである。にもかかわらず、傍らにいる保育者によって、言葉として表現されてみると、まさにそのときの自分自身の「心もち」だったと、子ども自身、すくと胸に落ちてしまうような、「ずるいじゃない

「い！」はそんな言葉のように思える。子どもの傍らにあつて、保育という営みをもつ働きの一つは、こんなふうには、子ども自身も、すんと胸に落ちてしまふ意味を、「ともにつむぐ」ことであろう。

さらに、この事態からは、現在の子どもたちのおかれた状況が、照らし出されて見えてくるように思える。それは、たとえば、現在の子どもたちは、本気でアゲハチョウと追いかけてっこをして、本気で「ずるい！」と思える生活が保障されているかという問題である。



現在は、子どもが片時も大人と離れることのできない生活である。その中で、子どもの傍らにいる大人は、当然のことながら「アゲハチョウは、どうせ追いかけるものではない」と思っている。時には、そう子どもにも語りかけ、その動きをやめさせることも多い。子どもたちは、とても早い時期に「どうせ……」という事態に、予想以上に触れて育つに違いない。つまり、大人にとって無駄と思えるような、たぐさんのことの味わいを奪われて育つ可能性が高いという問題である。

「ずるいじゃない！」という言葉が意味することは、幼稚園という保育の場では、「どうせ……」など気にすることなく、本気で遊ぼうというメッセージになっただけではないか。

たった一言に込められた、保育の秘密に迫る愉しみを大切にしたい。

（東京家政大学 家政学部 児童学科 保育学専攻）

上海⇄東京

子育てメール便(3)

橋本 雅子
津守 多実

まさことたみは東京の養護学校での仕事を通じて知り合った子育て仲間。まさこの子ども愛佳は三歳女児。たみの子どもクナは五歳男児。まさこ一家が夫、申屠（スンドウ）の出身地である中国上海に転居し、上海の暮らしがスタートしました。自然の中で遊ぶことが好きな二人が上海と東京の遊び場について語ります。

都会の中の自然探し

まさこ 東京では、遊具のある公園よりも、池や河川敷、草っぱら、雑木林などでよく遊びましたね。水中の生物を探したり、落ち葉や木の実、草の花を使って造形したり、木の枝で水鳥の羽を釣ったり。

そんなふうに自然に近い場所で遊び、生物を身近に実感できる機会を増やしたい、と探しているのですが、上海市内で原生林、雑木林が残っている場所で、申屠が思いつく所はないようです。

上海植物園には小川に小魚が泳いでいて、親子で夢中になりましたが、自宅から遠い上に庭園展示が主です。また万博会場に近く再開発のためか、建設現場から飛ぶ粉塵で、私がひどくせき込んでしまいました。雑草の種類一つとってみても、日本の身近な自然環境の豊かさ、生態系の複雑さを痛感する日々です。

たみ クナが好きなので、東京

の国立自然教育園によく行くので

すが、その講座に参加し日本の自然の豊かさを実感。しかし、人によって自然が壊されつつある危うさも実感。都会の真ん中にあることによって、自然の推移と衰退が自然教育園の中でわかります。

公園そのものが研究機関で天然記念物であって、自然を知る場所ではありませんが、触れ合う場所ではなく、触ってはいけない草花、入っては行けない場所が多く、遊ぶには不自由です。守らなければいけないということがよくわかる反面、触らなければ決してわからない、人と自然とのかかわりをどう取り持っていけばよいのか、考

えてしまいます。

このごろ、クナは植物に強い興味を示し、今日は幼稚園から帰ってきた後、家の近くの道端でカタバミ探しをして、種が跳びはねるのを恐れと興味のまなざしで見えました。渋谷の雑踏の植え込みに絡まっている草の種が熟すのを、毎日楽しみにしたり、何ともささやかな自然とのかかわりです。自然のものは、生理的な嫌悪感と興味の境目にあります。
まさこ カタバミ、偶然私たちも数日前に近所でみつけ、触っていました。顔まで種が飛び散ることが怖い一方、手のひらの中で種が弾けることがおもしろかったよう

でした。

ただ、以前は好んで手にした水を含んだその土の手触りを、しっかりと敬遠するようになっていました。渡中してからまいたハツカダアイコンを収穫したときにも、うれしさよりも手にねっとりつく生温かな泥の不快感がまさり、すぐに手を洗いたがりました。

クナくんのジジちゃんちで、遊びが盛りあがるうちに、お庭の畑に水を引き込んでぬかるませ、「チヨコレート工場」に見立ててバスを出し入れするうちに、自分たちが中にじゃぶんと入ったことがありますたっけ。

自分は不快だと思っていたけれ

ど、ほかの子の様子を見るうちに
楽しめるようになった、そんな機
会を母子二人、どうつくれるかが
課題というか。小麦粉とか、別の
素材で探っていこうかしら。

た み 養護学校でも、泥などの
べたつく触感を生理的に嫌う子
に、いかにしてそのおもしろさを
伝えるかは今も課題です。幼稚園
では、はやりの泥団子作りを、先
生が率先して子どもに伝えてい
ます。

クナも一時期好きで会心の作は
持って帰ってきてたけど、本当に
自分からは好きにはなりません。
でも、ドロドロとした触感に対し
ての抵抗感はなくなりました。

小麦粉については、乾いた状態
から始めるといいですよ。サラサ
ラした粒子に触れるのはそれだけ
で楽しいから、気持ちと手が慣れ
ていきます。クッキー作りにして
しまっても。泥にせよ、小麦粉に
せよ、実際に触ってみると、子ど
も自身の新しい発見が生まれてき
ます。

こういうものと出合っしてほしい
という思いをもつこと、自由遊び
を観念的にも守ることは、現代の
この都会の子育てでは必要なこと
と思います。

まさこ こちらには砂場はめった
になく、あっても白い小さな砂利
です。泥団子を作れないどころ



か、固めにくい質感で、形を作り
にくく、砂山も穴も、作る端から
崩れていきます。また砂粒が大き
く、二〜四ミリ角くらいあって、
寝転ぶと痛いくらいです。おまま
ごとのごはんくらいならいいかも
しれません。スコップでバケツに
入れる程度なら楽しめるのかも。

水はけがよく、衛生的に見えますが、子ども自身が材に引き込まれ、展開し始めるような魅力が感じられません。なせ子どもの遊び場にその材を選んでいるのか、意図がよくわかりません。

植栽用土は粘土質でかなり硬く、仮に日本の砂場と近い質感の砂を求めれば、建設現場から持ち帰るしかないかもしれない、と申屠と話しました。

子どもの遊び場として考えると、地域の古い公園のほうが緑も多く、魅力的。それでも庭園形式に植栽されていて、木に登ろうと思ってもまだ細く若く、ほかは竹林や、枝が高い位置にある針葉樹

です。愛佳は遊具で過ごすのはごくさわりで、私とただ走ったり、水のない人工の滝の岩場を登ったり降りたり（そんな遊び方をする幼児も児童も、ほかにはいません）。また、針葉樹の落ち葉を使って小さな家を作ったり。愛佳は楽しかったようですが、成人の利用者が多いこともあって安全に迷惑もかからないよう遊び込めるような空間が見つけにくく、魅力

ある遊びの空間や素材を提案するには、今まで以上に大人の機転や発想の転換が必要に思います。

残念ながらそこは、自転車でも時間がかかる距離なので、よく行くのは遊具のある公園です。遊具

に期待する気持ちが強くなったのでしょうか、日本に当たり前のようであった砂場、フランク、鉄棒、ジャングルジムなどの設備がないことで、その効用をかえって意識するようになっていきます。

子どもが見いだす遊具の魅力

たみ 遊具のありがたみ、あまり考えたことはありませんでした。私は独身だったころ、公園に遊具があると景観を損ねるし、自然とのかかわりに異物が入るようでげんなりしていたんです。そして養護学校で子どもとかわるようになって、公園での遊具の意義をさらに感じなくなり、遊具に頼

らず、公園の空間で子どもと楽しく過ごすためにどうしたらいいかということを考えるようになりました。

ところが、子どもが生まれて母親として子どもと公園で過ごしてみると、遊具には求心力があることに気づきました。遊具に助けられるとでもいうのか、親と子という一対一の関係に新しい展開が生まれ、ほかの親子との接点にもなります。

私は公園ではよく、学生時代のデザインの先生の「どんなものにも作った人の意図がある」という言葉を思い出します。使っていくと広がっていくもの、あっさり

終わってしまうもの、突き詰めると作り手の意図がそこにあるのです。公園の場合はさらに公園全体の

コンセプトや配置など、行政の考えも反映されますよね。東京近辺では、遊具の老朽化による事故が相次ぐ中、リニューアルした公園の遊具からは安全第一というメッセージが伝わってきます。

まさこ まさに上海も同じく、新しい遊具は二歳児が比較的安心して遊べるような作りです。登れるような木々もないので、ジャンクルジムのように、自分の腕の力で全身を引き上げたり、不安定な場所のでバランスを取りながら重心を移動させるようなことを遊びの中

でしようと考えると、遊具の使い方から外れます。

たとえば、低い滑り台の丸屋根に上ったり、複合遊具の柵の外側をジャングルジムのように渡ったり、よじ登ったり。遊具近くの大入用健康器具を、アスレチックに見立て、全身で楽しめるような遊び方を創作しています。

一工夫した使い方でない、遊びが広がり始めるときの浮き立つ気持ち、お互いに生まれてきません。

今日街へ出かけた帰り道、バスの路線を間違え、延々と歩くことになった道中の出来事です。にぎやかな市場近くの小学校の隣の駐

車場で、小学四、五年生くらいの男の子三人が、一本の壊れたビデオテープから長い長いテープを引き出していました。横幅三メートル、奥行き五く七メートルくらいの広い範囲にテープを渡し、奥のブロック塀の柄の穴と、歩道脇の柵にテープを絡ませて、織り機の縦糸、横糸のように編んでいきます。夕暮れどきに、織られた黒いテープが風に揺れ、夕日を受けてキラリと反射します。

三人が集中して、それぞれがクモの巣のようなテープの中を、新しい糸をどこにくぐらすか工夫している光景は、疲れが吹き飛ぶほど素敵な作品でした！ 私も壊れたテープを使って楽しむことがありましたが、あれほど空間を広げ、変えるものとは思わなかったので、本当に新鮮でした。

上海での子育ての様子にはいろいろ思うところがありますが、こういうすき間があることを、本当にうれしく思います。

そちらでも、インスピレーションがわくものに出合えたらいいですね。そしてそんな出合いがあれば、また教えてください。

たみ 昔、よく古い音楽のセットテープが絡まっていた光景が思い浮かびました。あの、アナログさ。中国のよさは、そういうすき間にあるのかもしれないです。

ね。東京では人の目が届かないすき間の遊びはあまりなく……。駐車場での話が出ましたが、そちらでは子どもが走っている姿、見かけますか？ 日本の都市部では、路地も、道に面した公園も、子どもが走るには危ない場所で、親が子どもを追いかけている姿をよく見かけますよね。

まさこ 小区内の公園には柵がなく、周囲は住民の駐車場兼道路です。子どもたちは飛び出すことなく、器用に公園だけを走り、大人が追いかける光景は見ません。

今度お話ししたいのですが、遊ぶときの子ども体の動きのこと、ちょっと気になっています。

保育の現場から

言葉がけの難しさ

藤 樫 啓 太

「早くしなさい！」

保育における難しさはたくさんあり、保育者の援助についても正解がないという部分こそ、保育のおもしろい部分だと思っています。

その中でも、最近特に難しさを感じているのは、「子どもに対する言葉がけ」です。子どもが保育者の何気ない一言まで記憶していたときには驚いてしまいますが、保育中における言葉遣い、その中でも直接子どもにかける言葉には、配慮をしていかなければならない必要性を感じています。

なぜ、急に言葉がけについて気になり始めたのかというところ、それは園内研修の際に職員間で「言葉がけ」をテーマに話し合ったことがきっかけでした。

まず普段私が、保育中にどのような言葉を発することが多いのか、ということについて振り返ってみますと、「早くしなさい。あと〇〇秒で始めるよ」「〇〇しないと〇〇にするよ」といった「脅し」ともいえる内容が多いということに気がつきました。おそらく、子どもを自分の思いどおりに動かそうという気持ちが強く、知らず知らずのうちにこのような言葉をかけてしまっていたのだと反省するきっかけとなりました。園

内研修は、その後、より良い言葉がけとはどのようなものか、という内容に進んでいきました。

保育における、子どもへの厳しさとは

私たち保育者は、言われたとおりにだけ活動する子どもではなく、前向きに活動できる子どもを育てようとしています。子どもに対して一方的で、何の意図をもたない厳しい言葉をかけることによって、子どもは保育者に言われたとおりに活動します。なぜなら、やらないと先生に叱られるという恐怖心をもつからだと思いますが、それでは保育者からの一方的で強制的な活動となってしまうからでしょう。

保育においては、子どもに厳しさを与える場面も必要だと思いますが、それが保育者の単なる感情の発散であってはならないと思います。保育者は、日ごろの子どもの様子を見て取り、一人ひとりの子どもの内面をとらえた上で、必要な厳しさをもっていくことが大

切だと思えます。私の園の教育方針の一つに「自発的な子どもを育てる」ということがあります。これはいかなる場面においても、誰に言われるまでもなく、「自らが進んで活動する子どもを育てる」ということです。

このような自発的な子どもを育てていくためには、どのような援助が望ましいのか？ ということは日々の課題ですが、援助の中で「もっと頑張れ！」というような言葉がけは、保育者の子どもに対する愛情や期待の表れの一つではあります。

子どもは素直であるが故に、保育者に言われたことは、多少難しくてもある程度のことではできてしまうのです。しかし、保育者は「できた」という結果だけを、保育の評価としていては不足だと思えます。何か「できる」ということよりも、子どもがどのように活動に取り組めたのか？ 活動の過程においてどのような成長があったのか？ という姿に対して、子ども

の成長・保育の価値を見いだしていくことが大切だと思います。

瞬間的な言葉がけの難しさ

それでは、子どもが自発的に活動していくためには、どのような言葉がけをすることがより良い援助といえるのでしょうか？

日ごろの保育の出来事から考えてみたいと思います。私が担任をする五歳児クラスでは、「絵本先生」という活動を行っています。これは、子どもが自分の好きな絵本を幼稚園に持ってきて、クラスの友達を前にして音読をするという活動で、「文字に触れる」「友達の前で表現する」「聞く側の態度を育てる」などのねらいをもって行っています。

ある日、M子の順番が回ってきて、帰りの会の時間にいよいよ読むこととなりました。保育者用の高いいすに座り、本を手に持って準備をしたものの、なかなか

か声が出てきません。M子が読むのを待っているクラスの子どもたちからは「始めてもいいよ」「頑張つて」などの応援があり、担任としてうれしい気持ちになりながらも、その次のM子への言葉がけに迷い始めました。

M子が勇気を出して読むことができるためには、何と言ったらよいのでしょうか？ 私は「練習してきたとおりに読んでごらん」とだけ声をかけましたが、結局その日は一言も出せずに帰りの時間となりました。

その日の降園時に残ってもらいM子と相談をする時、「家では家族に聞いてもらってバッチリ練習をしてきたんだけど、みんなが見ていると恥ずかしいんだよね」という本心を聞くことができました。

M子の場合、日ごろの様子から考えると、保育者が援助をし過ぎてしまうことよって「一人で絵本を読めた」という達成感が薄れてしまうのではないかという予想もしていました。そのため、今回は助け舟を出

さず、M子が読みやすい状況をつくり、あとは彼女が勇気を出せるまで待とうと決め、様子を見ることにしました。その後、M子は三日連続で発表に挑戦しましたが、いずれも絵本を手に持ち、十五分ほど無言のまま終わりました。

四回目は、本人の希望から少し日を空けて行ったところ、小さい声でしたがついに読むことができました。クラスの子どもたちも毎回温かく見守っており、



友達の頑張る姿をお互いに支えられるようになった、クラスの成長も感じられる出来事でした。このケースで配慮をしたことは、声が出せないM子

をおだてたり、プレッシャーを与えるような過剰な励ましをしないことでした。それよりも、「Mちゃんはいっぱい練習してきたのだから、きつと大丈夫だと思おうよ」と、M子が練習をしてきた取り組みを認めるようにし、積極性もてるようにしたいと考えていました。しかし、M子が絵本を読もうとしても声が出せなかったその瞬間に、どのような言葉をかけたらいいのか、援助に迷ったケースでした。

掃除の時間での言葉がけに悩むことも多いです。クラスのA男は、掃除の時間になっても遊んでいることが多く、掃除の時間が終わると誰にも気づかれないうに自分のクラスにそっと入室することが続いています。私は「みんなが掃除をしているのに、遊んでばかりでズルいんじゃないの?」という言葉がけを繰り返していきましたが、いっこうに掃除に取り組むこともないA男への言葉がけに迷いました。

あるとき、自分がA男にかけている言葉は「掃除を

やりなさい」という「強制的な言葉」ばかりであることに気づき、これではいけないと反省をしました。A男が進んで掃除に取り組めるようになるためには、どのように働きかけたらよいのかということに悩んでいたのですが、まずはA男との信頼関係をつくることや、私自身が彼のことをもっと理解していかなければならない必要性を感じました。

それからというもの、私はA男に対して「掃除をしなさい」という言葉がけをせずに、それよりも彼と一緒に遊び、スキンシップをとりながら、まずはA男と心を通わせられるように心がけました。

すると、しだいにA男から「先生、一緒にお弁当を食べよう」など、私にも話しかけてくるようになり、掃除をする私の姿を見ながら、いつしか自分から掃除に取り組むようになっていきました。そういうときには、私もA男のその取り組みを見逃さないように声をかけ、認めるようにも心がけました。

すべての言葉がけは、 子どもの実態をとらえた上で

言葉がけというのは大切な援助の一つですから、何の意図ももたない言葉ではなく、その子を伸ばすための内容の言葉であることが大切だと思います。もちろん、子どもの様子はそれぞれ違うわけですから、一人ひとりに対しての言葉がけも異なっていくはずですが、すべての子どもに対して同じ言葉がけをすることが、必ずしも子どもの成長につながるとはいえません。そのため、言葉をかける前の保育者の役割として、まずは子どもを理解しておかなければならないということがいえると思います。

日々の記録や保護者からの話、ほかの保育者の目にとらえた姿などから個々の子どもの実態を考察し、自分なりの見解でその子を理解していきます。そして、その子の成長している面や今後の課題などについて、

考察を深めていきます。この継続的な作業の積み重ねこそ、幼児を理解することにつながり、意図的でよい良い言葉がけへの第一歩になるのではないでしょうか。

また、「自分が子どもをどのようにとらえているか？」ということに加えて、「自分は子どもにどのようにとらえられているのか？」という逆のことも意識するようになりました。言葉がけにおいて、子どもの実態をとらえることは大切だと述べてきましたが、それに加えて、子どもから見た「自分」はどのように映っているのだろうか？ ということも意識する必要があります。があると思います。

なぜなら、保育者が自分のかけた言葉について、子どもがどのように受け止め、感じているのかということとを省みること大切だと思うからです。このことは、言葉がけに限らず、保育者の言動すべてにおいても当てはまることではないでしょうか？

子どもから「先生は、僕の話聞いてくれないんだもん」「先生はいつも怒っていない？」などと言われたことがあり、ショックを受けたことがあります。自分の保育におごることなく、常に謙虚な姿勢を忘れることなく保育を行っていくためには、自分が子どもにどのように見られているのか？ ということを意識しておく必要があると思います。

今回の執筆にあたり、「保育者の言葉がけ」ということをテーマに、自分自身の言葉がけについても振り返ることができました。どのような言葉がけがふさわしいのかということを考え、子どもを伸ばすことができるような言葉がけや、子どもが自発的に活動できるように言葉がけを心がけていきたいと思えます。

また、子どもの言葉遣いを指摘する前に、まずは自分が子どものモデルとして恥ずかしくない言葉遣いを心がけていきたいとも思っています。

(玉川学園幼稚部 教諭)

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み（18）〉

地域センターにおける総合的な「保育」の場

イギリス視察訪問（1）

塩崎美穂

イギリスへ

日本は今、二元的な保育制度の成立以降、これまでに経験したことのない変化のときを迎えています。これに対し、私たちがこれから向かい得る「保育」について考えれば考えるほど、ほかの国の保育動向が気になりました。

そんなとき、折に触れて、「イギリスの保育が変わってきている」「今イギリスの保育がおもしろい」という報告を見聞きする機会があり、幼保

プロジェクトのメンバーで、イギリス訪問を考えるようになりました。

ただ誤解を恐れずに言うならば、イギリス行きを計画した当初から、私たちは、イギリスの保育に見習うべき「善き保育モデル」のようなものがあることを想定してはいませんでした。むしろ、大きな変化のただ中で、どのような悩みを保育者たちが抱えているのかにこそ関心がありました。

保育の場における話し合いの争点、保育者の迷いや日々の課題の内にこそ、グローバルに取り組

まれるべき研究のテーマがあるだろうと思っていました。

保育の様子

二〇〇七年八月半ば、私と同僚の二人は、イギリスを訪れました。今回訪れた施設は、首都ロンドンにある“Ann Taylor Children's Centre”、そしてイングランド中部、ノーサンプトンシャー州のコービーにある“Pen Green Centre”です。

「よく見知った動きをしている」と同僚がいうところのイギリスの保育者たちは、なるほど、子どもたちを視野に収めながらも手早く片づけをし、子どもの動きやすい導線を確認しながら遊びを保障し、困っている子どもには寄り添い、保育者同士で目配せなどしながら子どもの育ちを楽しんでいます。日本でも、日常的に保育の場で見える動きです。それは、何が養護 (care) で何が教育 (education) なのかという問いのナンセンスさを

感じる、まさに日本語の「保育」(care and education) という言葉どおりの動きに見えました。私たちは、その場生動的な保育者の動きを見て、また実践の様子―保育者間での打ち合わせの内容や、親とどんなふうにも子どもの育ちを共有しているかなど―を聞く中で、近年イギリスが取り組んできた保育改革が、いわば「本気」であることに気づかされました。

日本と同じようにイギリスでも、保育と幼児教育が、中央官庁では社会保健省と教育省、地方自治体では社会サービス局と教育局に所管が二元的に分かたれてきました。しかし、そもそも実践の場面で保育と幼児教育の境界はあいまいで、これを区分することは困難であり、しかもその区分にはおおよそ意味がないということは周知のことです。careのうちeducationが行われ、educationを意図した実践の中でcareが必要とされるというように、いまさら言うまでもないことで

すが「保育」とはcareとeducation双方が不可分な営みです。どちらが不足しても「保育」にはなりません。それを、楽しみに実践しているイギリスの保育者たちの姿に、私は正直、非常に驚きました。

それというのも、十年以上前の一九九四年の一年間、私はロンドンに滞在し、子育てするごく普通の母親から、次のようなことを聞かされたものだったからです。たとえば、パリからロンドンに移り住んできた、コロンビア出身の母親からは「フランスの保育システムは素晴らしかったが、イギリスには期待するものが何もない」という話を聞きました。また、ロンドン郊外に暮らす、イングランド出身の母親が、「イギリスでは、子どもがいると思うように働けないの」と言いながら、パートタイムで教師をしていました。

従来、イギリスでは「子育ては私的なこと」という方針が貫かれ、公的な保育の提供は「要保護

の子ども」に限られていました。「要保護の子ども」とは、貧困家庭に育つ子どもや、障害をもつ子どもなど、ごく限られた子どもを指しています。当時のイギリスでは一般的な家庭の親（とくに母親）は、子育て中には仕事を辞める、減らす、変えるなどをし、もし家庭外の「保育」を望むならば、高額な保育料を払うことは当たり前でした。私は、二元的な保育制度、家庭保育中心だったイギリスが、なぜ今このような「保育」の場をもつに至ったのか、その経緯を知る必要を感じました。私たちが日本で直面している課題にも、示唆する何かがあるのではないかと思ったりします。

子育て世代に即した 保育政策と財政的基盤の確保

いわゆる中間層の生活に大きな負荷をかけることで成り立っていたイギリスの保育政策は、ブレ

ア労働党政権の登場により、一九九七年以降大きく変容しました。それまでイギリスの社会通念としてあった、「子育ては私的なこと」という保育観をも変える勢いで、保育の改革(Childcare Challenge)は進められたといえるでしょう。

一九九七年十二月、選定した地方自治体に五歳未満の就学前保育のモデルセンターとして「エクセレンスセンター」(Early Excellence Centre)を設置し、先行的施策(initiative)が始まります。

「エクセレンスセンター」は、保育・幼児教育のみならず、親子への保健医療や親の就労支援を含む総合的な家族支援を展開し、地域と家族をつなぐセンターの役割を果たしていきます。

一九九八年九月、すべての四歳児に無料の保育・幼児教育が(保護者が望めば三歳児も)保障され始めました。日本では、予算的な後ろ盾が控えられたまま、従来のインフラを利用する「認定こども園」(II 幼保の一体型運営)が構想され実

践も始まりましたが、イギリスでは、子育て世代家族の生活変容に即した「保育」のセンターが構想され開設し、それまでの保育制度の枠組みを変え得る保育予算の増額が果たされています。

「エクセレンスセンター」と平行して、人生の確かな出発を保障する「シユア・スタート」(sure start)の地方プログラムも開始されました。当初は、生活困窮地域(disadvantaged areas)を対象とした当プログラムも、次第に対象地域を拡大し、今ではことさらに「要保護の子ども」にのみ限定されていた従来の保育政策から離陸しています。

二〇〇三年三月には、「エクセレンスセンター」と「シユア・スタート」のそれまでの施策を発展させた形で「チルドレンズセンター」(Children's Centre)事業が始まります。すでにある保育施設を利用しながらも、二〇〇八年には二五〇〇か所、そして二〇一〇年には三五〇〇か所の「チルドレンズセンター」の設置が計画され



▲Baby & Toddler Nest (Pen Green Centre)

ています。

このチルド
レンズセン
ターを中心
に、全日制の

「保育園」

(full day

care・八歳未

満の子ども対

象で学童保育

を含み、一般的に朝八時から、夜七時まで保育を
行う)が急増し、二〇〇三年から二〇〇五年のわ
ずか二年半の間でも、定員数が三十八万人から
五十五万人に増えました。この急激な増加をみ
れば、本来イギリスの人々に必要とされていた「保
育」の場が、ようやく用意され始めたものと理解
されるでしょう。

「シェア・スタート」の事業費総額を見ると、

一九九九年に二億千三百万ポンド(約三百五十二
億円)だった予算が、二〇〇四年には十億千九百
万ポンド(約二千三十三億円)、五年間で約五倍
になり、二〇〇七年には十八億九百万ポンドに増
えています。

視察から見えてきたこと

訪問した「保育」の場では、就学後の学校との
接続を意識した幼児教育への配慮も含まれてはい
ました。しかしそれよりも、親つまり、若年労働
者への就労支援事業を併設することのほうに、セ
ンターのスタッフは気を配っているように見えま
した。つまり、幼保の一体化や統合がイギリスの
保育政策の目標ではなく、家族のためのセンター
を子どもを中心に構築することが莫大な予算付きで
進められているのです。

確かに、子どもが暮らす家庭の経済的福祉を向
上させることは重要です。子どもの心身の健康や

生涯を通じた学びへの基盤づくりのためにも、親が持続可能で安定的な収入を将来にわたって見込めることは、最も基礎的な子どもの権利でありましょう。家族が世帯収入をもつて構成されるユニットであれば、親の就労の課題を避けて子どもの福祉や教育を考えることはできないわけです。それが、訪問した「保育」の場には周知徹底されていきました。

イギリスの保育は、歴史的文化的背景や経済政策の違いもありますし、日本で直ちに保育モデルにできるようなものではないと思われれます。それについての見通しは、渡英前と変わりません。ただ、これからの日本の「保育」を考えると、既存の保育所や幼稚園というインフラに頼り過ぎていては子どもとその家族に必要な「保育」を生成していくことははやできない時代なのではないかと、今回の視察によって考えさせられました。

(お茶の水女子大学 幼保プロジェクト 専任講師)

註

1 岩間大和子「英国ブレア政権の保育政策の展開——統合化、普遍化、質の確保へ——」『レファレンス』(二〇〇六年四月)、埋橋玲子「チャイルドケア・チャレンジャーイギリスからの教訓」(法律文化社、二〇〇七)、『二〇〇六年十月十二日 経団連会館国際会議場 ヨーロッパに見る総合施設の実情と保育の近未来』私立幼稚園経営者懇談会／(株) 保育システム研究所主催、社会福祉懇談会協賛など。

2 阿部菜穂子『異文化で子どもが育つとき』(草土文化、二〇〇四)では、従来のイギリスにおける一般的な公的保育の不在が詳しく報告されている。

3 児童法(一九九八年)において、地方自治体には、要保護児童にのみChildcareが義務付けられているが、児童ケア法(二〇〇五年)になると、一般の就労家庭の子どもへとChildcareは拡大され、各自治体には、Childcareを「提供」ではなく「確保」すべきことが課された。以上、岩間論文(前掲) 参照。

4 Sure Start に ついては web-site に 詳し。

<http://www.surestart.gov.uk/>

5 岩間論文(前掲) 参照。

編集後記

今号では「子どもと自然」を特集し、中学・高校の生物の先生、移動動物園の方、樹木医、そして幼稚園教諭とさまざまな立場からご寄稿いただきました。また連載中の「上海⇄東京子育てメール便」でも、子どもが自然と触れ合って遊ぶことが難しくなっていることが話題になっています。

手元から遠ざかろうとしている自然に、こちらから歩み寄るために何から手をつけたいのか、と焦りのようなものを感じます。しかし、乳幼児精神保健学会についての話や保育者の一つひとつの言葉かけに注ぐ細やかな考察などを読むにつれ、“ああ、こういう一人ひとりの人を大切にすることも、遠回りのようでいて、自然破壊の問題に対する具体的で着実な応答の仕方なのでは”と思われてきます。(H)

幼児の教育 第107巻 第6号

平成20年6月1日発行
編集兼発行人 浜口順子
編集部 永山 綾
発行所 日本幼稚園協会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発売所 株式会社 フレーベル館
☎03-5395-6604 (編集)

振替 00190-2-19640
印刷所 図書印刷株式会社
定価 550円 (本体524円)
©日本幼稚園協会 2008 Printed in Japan

表紙絵 佐藤奈々
扉カット 佐藤奈々
扉題字 津守 真
カット 斎藤明子
編集委員 伊集院理子
上坂元絵里

ご購入のお問い合わせは、
フレーベル館までお願いします。
☎03-5395-6613 (営業)

次号予告

- ・子育ては自然と文化の出会いどころ 浜田寿美男
- ・可能性をひらく巡回保育相談の現場に学んで
- ・子どもと絵本 湯沢朱実

鈴木素麗香



☆次号の内容は都合により変更される場合があります。

おたより大募集

ご意見ご感想をお寄せ下さい。今月号の中で、特によかったもの、取りあげてほしい内容などお知らせください。本誌へのご投稿もお待ちしております。
はがき：〒113-8611 東京都文京区本駒込6-14-9 (株) フレーベル館
「幼児の教育」編集部

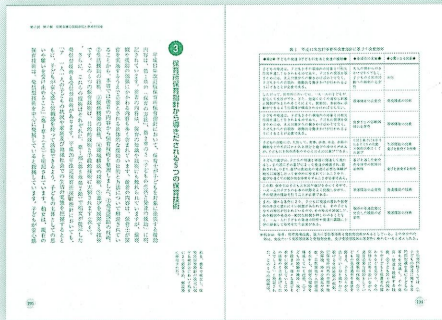
Fax : 03-5395-6622 E-mail : youjimap@yaho.co.jp

新保育所保育指針・幼稚園教育要領対応 保育者の保護者支援 保育指導の原理と技術

柏女霊峰・橋本真紀/共著

保育者の専門性を生かした子育て支援、すなわち、現場で培われた「保育を通じた保護者支援」を明快に整理。これからの「保育指導」を提案。

21×15cm 280頁 定価1,680円(税込)



107-20

はじめに

序章 保育指導の体系化の必要性

【第1部 保育指導の原理】

- 第1章 子育て・子育ての現状と子育て支援の理念
- 第2章 子育て・子育て支援の視点
- 第3章 保育士資格の法定化と保育士の課題
- 第4章 保育指導の意義と基本的視点
- 第5章 保育指導の基本構造と技術
- 第6章 保育者の責務と倫理

【第2部 保育指導の技術】

- 第1章 保育指導の基本姿勢と対象
- 第2章 保育指導の展開過程と基本的技術
- 第3章 保育指導の実践場面と手段
- 第4章 保育指導における援助体制
- 第5章 保育指導の実際
- おわりに

キンダーブックの

フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。

フレーベル館創立100周年記念出版

倉橋惣三文庫 <全10巻>

倉橋に学び、保育を極める。
日本保育界の父と呼ばれ、現代保育に影響を及ぼし続ける倉橋惣三の主要著作、
倉橋に関する評論・エッセイを集めた全10巻。

倉橋惣三文庫①

幼稚園真諦

倉橋惣三/著 柴崎正行/解説



誘導保育など倉橋の理論・思想が展開される倉橋理解の基本書。倉橋研究を主導する一人・柴崎正行大妻女子大学教授の書き下ろし解説を付す。

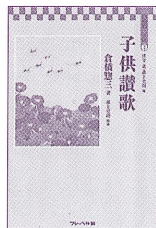
108-01

18×12cm 148頁 定価1,155円(税込)

倉橋惣三文庫②

子供讃歌

倉橋惣三/著 森上史朗/解説



倉橋の保育を倉橋自身が語る、青年期から晩年までの自伝。倉橋研究の第一人者・森上史朗子どもと保育総合研究所代表の書き下ろし解説を付す。

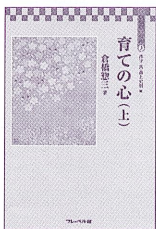
108-02

18×12cm 236頁 定価1,260円(税込)

倉橋惣三文庫③

育ての心(上)

倉橋惣三/著



倉橋保育の真髓が見える、小論や随筆を集めた『育ての心』の前半部分を収載。

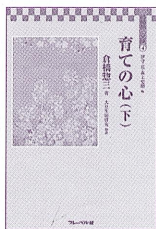
108-03

18×12cm 180頁 定価1,155円(税込)

倉橋惣三文庫④

育ての心(下)

倉橋惣三/著 大豆生田啓友/解説



『育ての心』の後半部分。新進気鋭の倉橋研究者・大豆生田啓友関東学院大学准教授の書き下ろし解説を付す。

108-04

18×12cm 244頁 定価1,260円(税込)

続刊予定

- ⑤幼稚園雑草(上)
- ⑥幼稚園雑草(下)
- ⑦子どもに生きた人・倉橋惣三(上)
- ⑧子どもに生きた人・倉橋惣三(下)
- ⑨倉橋惣三・その人と思想
- ⑩倉橋惣三と現代保育(仮題)

キンダーブックの

フレーベル館

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部 (03) 5395-6608にお問い合わせください。